

同僚として、友人として

岩切 正一郎

小玉先生と私は、ともにフランス文学を教えているので、それぞれの授業に同じ学生の出ていることがある。そうした学生のふたりが、ある日、授業のあとで、小玉先生の授業で「愛」の定義をすることになったのだけれど、私の考えも聞いてくるように言われた、という。しばらく考えたあと、魅力とか魔法を意味する « *enchantement* » という言葉を私は愛の定義に挙げた。数日後、その同じ学生に、小玉先生の定義はどうだったのか尋ねてみると、「苦しみ」(*souffrance*) と言っていた、という。その答えをきいて、私はアンリ・ミショーの詩を思い出した。「魔術」という詩のなかで、〈私〉は言うのだ、いろいろな試練を経て、最後に、リングのなかに入って安寧を見出すことができるようになったいきさつは、話すには長い、だが、それをひと言でいうなら、こう言える、「私は苦しんだ」(*j'ai souffert*)、と。

「愛とは、苦しみである」……それを聞いたとき、私はヨーロッパ精神の奥底をふかぶかとのぞき込んだような気がしたのであった。

私はICUに1996年に着任したが、その頃、小玉先生は、英語開講の一般教育科目のコースで、構造主義とナラトロジーの分析手法に基づいた『ボヴァリー夫人』の分析と解釈を、英訳のテキストを使って行っていた。それに触発されてフランス文学を志す学生が毎年いて、その学生たちは次にはもちろんフランス語で書かれたテキストに取り組むのである。文学テキストを分析的に読むというアプローチは、学生にとって実にスリリ

ングな体験だったようだ。フランス語を始めてまだ2年そこそこののに、自発的にジュネット著『フィギュール』の原書輪読会をやっていた。そしてフランス語で卒業論文を書くのだった。その後、先生の理論的関心は、おとぎ話などにみられる精神の祖型と物語の意味論へ移っていった。その成果のひとつを、今号の論文で読むことができるのは嬉しい。小玉先生の薫陶を受けた教え子たちは、気鋭の研究者として、社会人として活躍し、あるいは大学院で学んでいる。ICUにおける優れた教育者としての小玉先生のことは、自己宣伝をしないその人柄もあって、あまり知られていないのではないだろうか。

学生の話では、妥協のない厳しい授業のようであった。じっさい、先生自身もそう言っていた。フランス人の先生が教えてくれるフランス文学、というので、なにかお洒落で楽しいもの、あるいはスノビズムを満足させてくれるものと勘違いしてやってくる学生もいないわけではない。だが、楽しいと言ってもそれは知的な愉悦であって、テキストを分析し、解釈し、口頭で論じ、レポートを書く、という地道な作業を通じて、きちんと自分の思考を構築していく、というプロセスを学生に求めていた。先生みずから、入念な準備をして臨んでいた。だから、それに応えられない学生には叱責もある。昔はそれで済んでいたのに、最近は怒られるとすぐにひしゃげる人もいて、あとで小玉先生は私の研究室に来ると、ちょっと怒りすぎたのではないだろうか、と、なんだか怒った本人がしょげかえっている。そんな先生の姿を学生は知らないのである。いっぽうで、その求めにちゃんと応じる学生にはとても高い教育効果を及ぼし、学生も自分でその手応えがわかるので、喜んでいた。

個人的に私もまたお世話になった。文学の授業でも、戯曲などの翻訳の仕事でも、テキストのなかで意味のよく分からない表現があると、私はいつでも小玉先生に助けを求めた。フランス語で書く論文は添削をお願いした。先生はいつも気安く応じてくれた。いくら感謝してもし足りない。お互いの家がそれほど遠くないので、植物の世話を頼んだり、ご主人の運転

する車で雪の帰路を送ってもらったり、あるいは一緒に観劇にいたり、海辺を散歩したり、学外でも楽しい時間を持った。私の妻によれば、小玉先生の服のセンスは一目でそれと分かるほどフランス的に洗練されているらしい。私はその方面のことは疎くてよく分からないのが残念だ。

学生との対話において、そして同僚のわれわれに対しても、小玉先生の中心には、偽善を排した率直さがあった。これは何でもないことのようにみえるかも知れないが、偽善のないこと、つまりギリシャ語の語源 (*hupokrisis*) に照らせば仮面をつけて演技しないこと、良きにつけ悪しきにつけ、自分の心のなかの思いとは違っていることを言わないことは、たとえ神の前に立つICUにおいてさえも、困難なことなのだ。いつわりの希望や甘言によってずるずると青春や人生を無駄にする手助けをするよりも、現実を映す鏡に相手を映してあげて、たとえ苦くても、魂を健康にする薬を飲ませる、そのような、さばさばした大胆さを小玉先生は持っている、どうやらそれは自分自身にも向けられていた。しかもそれがしかつめらしくならず、これはフランス文学を中世・ルネサンス時代から貫いてながれるゴーロワ精神のしからしめるところであろうか、サルトルのいう「くそまじめな精神」を笑い飛ばしてしまうユーモアがあった。

同僚としての19年は、あっという間に過ぎてしまった。その間、私は先生のまえでは、何を話しても安心していられた。窓から見える雑木林の木の幹を、キツツキが叩いているというので、ある日嬉しそうにしていたこともある、その研究室にお邪魔して、真面目なこともくだらないことも話してきたのだ。あまりにも空気のようなものになっていたので、いつでもその環境があるような気がして、うかつにも、先生のご退職とともに、キャンパスの日常からそれが消えてしまうことに心の準備をしていなかった。そして、ふいに、よるべない寂しさのなかに佇んでいる。

大学での教育・研究にひと区切りをつけ、新しい人生の道をあゆまれる小玉先生に幸あれと願い、深い感謝を、友情の念をもって捧げる。

